
恋神様からのプレゼント

沙夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋神様からのプレゼント

【Z-ONE】

Z0732M

【作者名】

沙夜

【あらすじ】

どこのにでもいそうな普通の高校生、貴瀬和人。

彼は転校してきた日の帰り道、謎の御守りを拾つ。

ここから彼の人生は変わってしまう（？）。

第一章 恋護り（前書き）

初投稿です。

至らぬところはあると思いますが自分なりに頑張ってみましたが、
楽しんで頂ければ幸いです。

第一章 恋護り

俺と付き合ってください

女の子に愛の告白をするとき、そんなありきたりな言葉でいいのだろうか。

たしかに、自分の伝えたい内容を簡潔にまとめるとそんなんだろうが。

もつと自分らしい個性のある伝え方はないのか？

告白するときに「やらない」と言つて、それが相手の地雷踏んで大失敗。

なんて結果にはならなくて済むだらう。

だが、それでいいのか？目的のために自分の個性を犠牲にするのか？

それは男として、いや人間として許せるのか！？

そんなことを考えながら、俺は一步前に出る。

「貴瀬和人です。これからよろしくお願ひします。」

そう、俺は今日この如月高等学校に転校してきた。

「貴瀬は小学校4年生まではこの近くに住んでいたが、親の仕事の都合で5年間引っ越していたそうだ。もしかしたらこの中に顔見知りがいるかもなー」

ちなみに、さっきから喋つてるのは担任の森木先生。男ではない。すげー煙草が似合いそうな女教師だ。

なんつーか元ヤンじゃね？つてオーラを出している。

「じゃ、席はあそこな。」

そういうて指されたのは最後列から手前の席だった。

不自然すぎる。

何故他の席に生徒が座つてゐるのにあんな中途半端なところが空いているんだ？

「先生、そこって遅刻してるだけじゃ……。」「えつ？ マジで？

「いいんだよ、遅刻でもサボりでもそんなの居ないと一緒だつて偉大な教師が言つてたんだから。」「誰だよそんなとんでも発言した偉大な教師つて。

「お前らに教えといつてやる。其の教師曰く、『人生は椅子取りゲーム』……一瞬の油断で自分の立場が奪われる」とだつてある。」「間違つてはいないがこの場合は違うだろ！

だがまあいい、別に俺が損するわけじゃないしな。

俺はとりあえず指定された席について。

するといきなり教室のドアが開いた。

「すいません！ 遅刻してしまいました！」

おそらくこの席の所有者であろう男が入つてきた。

「おう、お前は今日から席なしだ。転校生に譲つてやつた。」「しばしの沈黙、そして

「ええええええ！ ジヤあどこで授業受ければいいんすか…？」

どうして自分の席が転校生に譲られたのかよりもまずそつちを聞くあたり、この教師はどうやらいつもこんな感じなんだろうな。

「これから事務室まで机をとりに来い。」「

そう言つて森木先生は教室を出て行つた。ついでに遅刻男も出て行つた。

・・・机つて事務室に置いてあるもんなのか？

「私は神奈志保。かみなしほ隣の席だよろしくね、貴瀬君。」「

突然話しかけてきた声の主は、茶髪のポニーテールで、活発そうな女子だった。

「ああ、よろしく。」「

「昔住んでたつてことは私よりもこのあたりに詳しいんじやないかな？ 私はここへ引っ越してきてまだ1年半だからまだちゃんと覚えてないし。」「

「それでもないよ、5年で店とかもすっかり変わつてたから。」「

そんな他愛のないことを話していると

「おー、転校生がいきなりクラス（隣の席）の女の子との『ミコを発生させたー。』

と、後ろの席の生徒がダルそうな声でアホなことを言つてきた。
そいつは手を横にだらしなく垂らして机に突つ伏した状態で顔だけあげて、ジト目でこっちを見ていた。

「またあんたはバカなこと言つて〜。」

「いいだろ別に、俺は石田賢。^{いしだけん}まあよろしくな。言つとくが俺の攻略ルートは無いからなー。」

言われなくても誰が攻略するか。

「この学校はレベル高いからな。それだけ攻略ヒロインも多いと思うぞ。」

「あ、ああ・・・。」

何なんだこいつは。

どんだけ恋愛ゲーム感覚なんだよ。

「はーい、みんな席について〜」

気がつけば既に一限目の先生が教室に来ていた。
遅刻男はいつの間にか戻つてきていて、前列でみかん箱を机代わりにしている。

森木先生・・・。いくらなんでもヒドいだろ。あれは机じゃねえ。

その後、俺は特に問題なく一日田の学校を終えることができた。
俺が帰路へ着こうとするが、校門の方から見知った人物が飛びついてきた。

「久しぶり〜」

「千晴・・・」

薄い桃色の髪をしたセミロングのツインテールの少女は、東條千晴。^{とうじょうせん}

俺の幼馴染みだ。

まあ俺にとつては幼馴染みというより妹みたいな感じだが。

「なんで会いに来てくれなかつたの～？」

千晴は頬を膨らませながら少し怒つてているようだつた。

こいつはキャラ作りとかじやなく素で頬を膨らませたりする、精神的に子供だ。

肉体的にもそうなんだが。

「お前の教室も知らないから、仮に会いたかつたとしても会えねえよ。」

「あ、そつか」

千晴はテヘツと舌をだして言つた。

これは、見る人が見れば最高に可愛かつたり、最悪にウザかつたりするんだろう。

なら俺はというと、慣れた。

昔はイラッときたりしたが、長期間過ごしていると慣れてしまつたのだ。

しかも5年間会つていなかつたのに平氣なのだ。人間の適応能力つてすごいな。

「それよりさ！一緒に帰ろ！」

「悪い、ちょっと寄りたい所があるからまた今度な。」

久々に帰つてきた町を見て回りたい、つてのが本音だ。一緒に帰るくらいならいつでもできる。

町見物だつていつでも出来るんだが、早く慣れておきたかつたしな。

「え～、残念。でも仕方ないか～。」

こういうときに物分かりがいいのは助かる。というか頭が単純なだけだが。

「じゃあまた明日ね～！」

「おう、またな。」

簡単なあいさつをして、俺は町の中をぶらついた。

コンビニ、本屋、ゲームセンター。大体の町の変化を頭に入れて、俺はふと思いついた。

そういうや幼馴染みつてもう一人いたな。

夕刻だからなのか人が居なく、神社は静まりかえつていた。

「おーい沙紀ー、いるかー？」

神社の前で呼んでみると、しばらくして一人の女の子がそーっと出てきた。

黒髪のストレートで、少し垂れた穏やかな目に俺は見とれてしまつた。

「和人君・・・？」

驚いたように綾川沙紀あやかわさきが俺の前に立つた。

「ひ、久しぶりだね。えっとおあ、お、おかえり・・・。」

何故か沙紀はメチャクチャ焦つている。

見た目はすっかり美人になつてるくせに、中身は昔のままなんだな。

「帰つてくるつて聞いてたけど、もう来てたんだね。元気そうでよかつた。」

「まあな。沙紀も元気そうだな。」

まさかこれほど美人になつているとは・・・。

「ごめんね。色々話したいんだけど、今は忙しくて・・・。時間があるときに話そう。」

「ああ、邪魔して悪かつたな。」

「じ、邪魔なんかじゃないよ、ありがと。」

なんでお礼言われるんだ？

こいつは昔からよく分からん。

「じゃあな。」

「うん、バイバイ。」

神社から出て、俺はまっすぐに家へと帰ろうとするが、道端に赤いものが落ちていた。

御守り？

なんか真ん中にデカデカと『恋』って縫われてるぞ。

持ち主どんだけ恋愛したかっただよ。

「おめでとうござります。あなたはこの『恋護りDX』人生が変わる刻~』の所有者として認められました。」

どこからか声がした。

は？ 何、今の？

「ですから、あなたは『恋護りDX』人生が変わる刻~』の所有者に認められました。」

俺は声がするほうを振り返った。

すると、そこには少女が無表情で立っている。

黄緑のショートヘアにジーンのものが分からぬ橙色の制服を着た、中学生くらいの子だ。

わざわざから何を言つてるんだ、この子は。

「ですから、あなたは『恋護りDX』人生が変わる刻~』の」

「もうそれはいいってんだよ！ 何回繰り返す気だ！？」

・・・・あれ？

俺は今初めてこの子に言葉を発した。

つてことは、もしかしてここにいつ俺の考えてることがわかる？

「はい」

少女は平然と答えた。

あー、面倒な感じがするぞ。なんで俺こんなもん拾つたんだ？

「面倒ではありません。男性にとつては夢のようなアイテムです。」

「嘘っぽいな・・・。で、何すればいいんだ？」

とりあえず、少しくらい話を聞いてやるか。

「別に何かをしろとはいいません。『恋護りDX』人生が変わる刻~』は、所有者に恋愛体験を楽しんで頂けるものです。」

なん・・だと・・・？

やつぱり面倒事じやねえか。

「他を当たつてくれ。」

「無理です。もうあなたを所有者と認めました。」

勝手な奴だな、おい。

「なら所有者としてこのアイテムを放棄する。」

「お断りします。」

「…………」

「なんでだよ！？所有者が捨てるつて言つてのに断るつておかしいだろ！？」

「この『恋護りDX』人生が変わる刻』は所有者の生活に大きな支障をきたさない程度の恋愛要素を取り入れます。」

「話を聞けよ！……」

俺の話には耳を貸さず、少女は淡々と自分の話を続ける。
「恋愛ショミレーションを』存知でしょう。それと同じような体験が可能となります。」

くそつ、とことん無視しやがつて。

だつたらこんな訴えは不毛なだけだ。

そう思つて俺は少女の話を聞くことにした。

「恋愛ゲーと同じつて、具体的にどうことだよ？」

「フランクでもやり直せます。」

な、なんだと！？

やり直せるつてことは、一日をやり直せるのか！？

「一日だけではありません。今日からやり直すことができます。」

そんな嘘みたいな道具があるのか。

正直信じがたいが、もしかするかもしれない。それに、俺には大したデメリットも無いみたいだしな。

おもしろい。

「やつてやる『じやねえか！』

俺のテンションが著しく上がる。

日をやり直せるなんて、誰もが望む力が手に入る。この際変な設定があつてもお構いなしだ。

日をやり直せるつてことは宝くじの当選番号もわかるし、テストも満点間違いなしだ。

「ありがとうございます。警告しておきますが、ワタシの姿や声は、他人には見聞き出来ませんので。」

「それを先に言えよ！人がいたら俺完全に変な奴だったじゃねえか！」

「過去形ではなく、現在形です。」

「つるせえ！」

誰にでも人生の変革期はある。

「所有者が認めたことにより、正式に契約が結ばれました。ワタシは恋神『エリナ』と申します。」

それは、突然やつてくるものだ。

「それでは、『恋護りDX～人生が変わる刻～』を開始致します。」

そしてこの刻、俺の人生は変革した。

第一章 恋護り（後書き）

いかがでしたか？

正直なところ、読んでもらえただけで光栄です。

この後書きでは知人にされたり、感想に書いていただければ質問などに答えていきたいと思っています。作中のゲスト有りで。

というわけで、知人からの質問。

『Q・和人はイケメン？』

（千晴）いやー カズは普通だよ。

（作者）随分あっさり答えたね。

（千晴）だつて本当に普通なんだもん。

（和人）おい、ちょっと俺を讃めてくれよ。悪くはないとかさ。

（千晴）普通なのもカズのいいところだよ

（和人）はあ・・・。もういいよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0732m/>

恋神様からのプレゼント

2010年10月30日09時22分発行